

一

秋里籬島（あきさと・りとう）

京都の著述家。享保18年（1733）―元文3年（1738）～文化9年（1812）頃。75―80歳

＊藤川玲満（れまん）「秋里籬島年譜稿」（『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』付篇、勉強出版、2014）

○〈名所図会〉の作者

『都名所図会』（安永9年〈1780〉刊）【画像】・『拾遺都名所図会』（天明7年〈1787〉刊）・『大和名所図会』（寛政3年〈1791〉刊）・『和泉名所図会』（寛政8年〈1796〉刊）・『摂津名所図会』（寛政8・10年〈1796・98〉刊）・『東海道名所図会』（寛政9年〈1797〉刊）・『河内名所図会』（享和元年〈1801〉刊）・『木曽路名所図会』（文化2年〈1805〉刊）

○〈絵本もの（絵本読本）〉・〈図会もの〉読本の作者

＊「後期読本」に属する。横山邦治『読本の研究 江戸と上方』（風間書房、1974）に〈稗史もの〉・〈中本もの〉・〈絵本もの〉・〈図会もの〉の4分類。

籬島の〈絵本もの〉・〈図会もの〉

1. 『源平盛衰記図会』（外題・内題）：西村中和・奥文鳴画。大本（26.6×18.8 cm）6巻6冊。寛政12年正月、〈京〉二鳩堂（額田正三郎・勝村治右衛門・今井七郎兵衛・額田莊兵衛・今井喜兵衛・小川五兵衛・生嶋小兵衛）刊。【画像】
2. 『絵本朝鮮軍記』：画者不明。半紙本（19.3×16.9 cm）10巻10冊。寛政12年（1800）2月、〈京〉出雲寺文次郎・〈江戸〉松本平助刊。【画像】
＊以下国文学研究資料館（国文研）所蔵の初印本（ナ4-718-1～10）による。
3. 『保元平治闘（かっせん）図会』（内題。外題「絵本保元平治」）：西村中和画。大本10巻10冊。享和元年（1801）8月、〈江戸〉松本平助・〈大坂〉柳原喜兵衛・〈京〉小川多左衛門・出雲寺文次郎・今井喜兵衛・小川源兵衛刊。【画像】
4. 『前太平記図会』：西村中和画。大本6巻6冊。享和3年3月、〈江戸〉西村宗七・鷲頭辰三郎・〈大坂〉林源七・藤井孫兵衛・大橋仁兵衛・灰方伊兵衛・〈京〉生嶋小兵衛・今尾猪輔・小川五兵衛・西村喜兵衛・今村八兵衛刊。

＊書名に「図会」「絵本」の混用が見られる（後述）。

長友千代治「上方読本の展望」（横山邦治編『読本の世界 江戸と上方』第二章、世界思想社、1985）

○籬島の〈図会もの〉：「**名所図会**の成功で気をよくした籬島は、その方法を用いて…新しく**読本の図会化**を始めた。**大本仕立て**にして、半丁あるいは見開きに全面的**精細な挿画**を効果的に入れて見やすくし、読者に提供したのである。（『源平盛衰記図会』を例として）まさしく**絵で見る軍記物語**、**目で読む絵本**に仕立てて、古典の平俗化をはかり、新しい読者の発掘拡張を試みたことは明らかである。」

○速水春暁斎（〈京〉）の絵本読本：「作・画を兼ねた作者であったこと、その作が絵で見る**実録**（*）・古典であったため、出版書肆と貸本屋によって底辺を広げられた読者に歓迎されたものと思われる。…（『絵本忠臣蔵』【画像】などを例として）**近世に起った敵討事件で貸本屋等に伝わった実録写本**を、出版書肆とともに絵本読本に仕立て、一般大衆の読書欲をそそったのである。」

○武内確斎作（著者名ナシ 後述）・岡田玉山画『絵本太閤記』（〈大坂〉）【画像】：「『絵本太閤記』はもともと**貸本屋に写本で流布**していた『**太閤真蹟記**』を中心に…読物にし、**精細な挿画**を一、二丁おきに入れて見やすくしたものである。作品は**実録物の系統**であるが、これを読み易い絵入本にして、挿画によっても一生がたどれるように趣向をこらしている。要するに**実録体小説が平明な絵入読物に革新**されて、出版されたと思えばよい。」

〈図会もの〉：籬島が創始。〈名所図会〉の方法に基づく**古典（軍記・軍書）の平俗化**。

〈絵本もの〉：玉山・春暁斎など大坂・京の絵師による作が著名。**実録写本に基づき**、〈名所図会〉の方法を応用（**）。

*「**実録 実録体小説**とも言う。当代に起きた、人々の興味を引くような大事件の顛末を、**虚実入り交ぜて綴った読みもの**。幕府権力者の人物名もそのまま登場するため出版できず、**写本で流布**した。読本の素材としても利用され、とくに〈絵本もの〉に著しく摂取される。」

（『読本事典』Ⅰ－ⅱ「上方＝〈絵本もの〉読本のひろがり」概説[山本卓担当]の注、笠間書院、2008）

** 浜田啓介「造本と読みもの—ある視点とその諸問題」（『国語国文』26－5、1957・5）
山本卓「『絵本太閤記』の成立と出版」（『舌耕・書本・出版と近世小説』第一章、清文堂、2010）
井上泰至「転化していく戦争のイメージ 絵入軍記・絵本読本は何を語るか」（『秀吉の対外戦争：変容する語りとイメージ—前近代日朝の言説空間』[金時徳との共著]8、笠間書院、2011）

籬島（含、存義）の関連作

ちなみに、籬島には〈図会もの〉・〈絵本もの〉に関連する以下の3作がある（7は存疑作）。

5. 『**信長記拾遺**』：軍書。大本10巻10冊。安永5年（1776）正月、〈京〉山本平左衛門・田原勘兵衛・出雲寺文次郎・伊豫屋佐右衛門・吉野屋為八刊。

*藤川玲満『『信長記拾遺』考』（前掲著書、2014 初出 2010・12）

6. 『忠孝人竜伝』：読本。半紙本 5 巻 5 冊。天明 2 年（1782）正月、〈京〉西村市郎右衛門・永田調兵衛・鈴木半兵衛（刊記によれば、他の 2 書肆と比べ住所がなく、後から入れ木された可能性が高い）刊。

*藤川玲満『『忠孝人竜伝』考』（前掲著書、2014 初出 2013・3）

7. 『絵本信長記拾遺』：〈絵本もの〉読本。多賀如圭画。半紙本、前篇 13 巻 13 冊、後篇 10 巻 10 冊。前篇、享和 3 年 4 月、〈江戸〉西村宗七・〈大坂〉誉田屋伊右衛門・和泉屋源七・播磨屋五兵衛刊。後篇、文化元年 4 月、〈大坂〉誉田屋伊右衛門・播磨屋五兵衛刊（刊記のうち、江戸書肆の部分、また大坂の 2 書肆以外についても板木を削った形跡あり）。

*藤川玲満『『信長記拾遺』から『絵本信長記拾遺』へー実録・軍書の読本化ー』（お茶の水女子大学「国文」125 号、2016・7）

**上記論文に「『信長記拾遺』における籙島の著述態度の特質を継承する姿勢ではない」との指摘があり、著者は別人か。

二

籙島の「読本」1～4 の共通項

前掲した籙島の「読本」（軍書を含む）のうち、1～4 の 4 作は、書名から言えば 1・3・4 が〈図会もの〉で（3 の外題は「絵本」だが、大本仕立てで、内容的にも〈図会もの〉の特徴を備えている。後述）、2 の『絵本朝鮮軍記』だけが書名と本の大きさ（書形が大本でなく半紙本）から〈絵本もの〉に分類されてしまう。

しかしこの 4 作には、結論から言うと、2 を含めて、**共通した方法による軍記の読本化**が意図されていると思う。この点の解明を通じて、籙島の「読本」の中で『絵本朝鮮軍記』の占める位置を定め、併せて「朝鮮軍記」の中での位置付けに言及することが、本日の報告の目的である。

籙島の「読本」1・3・4 の典拠

1. 『源平盛衰記図会』

○『源平盛衰記』：軍記。無刊記整版本。大本 49 巻 25 冊。**漢字カタカナ交じり**。「京城書林 瀬尾源兵衛刊行」。**【画像】**

○『平家物語』：軍記。講談社文庫上下（高橋貞一校注、1972） 「元和九年刊行の**片仮名交り**附訓十二行整版本を底本とし、流布本の詞章の標準」（同書「凡例」 ただし、漢字ひらがな交じりに改） 籙島使用本未調査（万治 2 年〈1659〉刊、大本 12 巻 12 冊の**漢字カタカナ交じり本**か）。

○『義経記』：軍記。日本古典文学大系 37（岡見正雄校注、1959） 「流布本系寛永十二年

版以前における古活字本系統の形がわかる」(同書「凡例」) 籬島使用本未調査(ただし本作は原則として漢字ひらがな交じり)

*大高洋司「秋里籬島『源平盛衰記図会』一軍記物語「読本」化の一過程」(「國學院雑誌」114-11、2013・11)

3. 『保元平治闘図会』

○『保元平治物語』: 軍記。大本、『保元物語』3冊、『平治物語』3冊、漢字カタカナ交じり。後者の末尾に寛永元年(1624)9月、「洛湓四条権十郎開梓」。**【画像】** 日本古典文学大系31『保元物語 平治物語』の附録として収まる両者の古活字本は、本文はほぼ寛永元年整版本と同じだが漢字ひらがな交じり。

○『参考保元物語』・『参考平治物語』: 考証。大本、各3巻9冊。漢字カタカナ交じり。共に元禄2年(1689)、〈江戸〉富野治右衛門・〈京〉茨城多左衛門刊。**【画像】**

*水戸藩の修史事業のひとつ。寛永元年整版本を基本テキストとして、複数の古写本と併せて校訂・考証したもの。校訂者の判断で本文を省略することがある。

4. 『前太平記図会』

○『前太平記』: 軍記。藤元元著。大本40巻41冊。漢字カタカナ交じり(漢字ひらがな交じり絵入り本もあり)。無刊記(元禄5年〈1692〉以前刊)。**【画像】** 叢書江戸文庫3・4(板垣俊一校訂、1988-89「片仮名交り本」に依拠して「平仮名交り」に改め、「平仮名交り本」の挿絵を加える〈同書「凡例」〉。)

*「原作『前太平記』は四〇巻の浩瀚な作であるが、その巻一の第一章「源家濫觴事」から第四〇巻末尾「為義武勇事」まで、一応原拠の首尾をリライトする。源経基・満仲と将門・純友の乱、頼光四天王の活躍、頼信・頼義・義家と前五年。後三年の役(えき)などを中心に、著名な場面は漏らさず採録する一方で、大幅な本文削除をして巧みに六巻に縮約している。」(『読本事典』I-ii「上方=〈絵本もの〉読本のひろがり」、『前太平記図会』の項〈山本卓〉、前掲)

籬島の「読本」2. 『絵本朝鮮軍記』の典拠

「嚮(さき)に堀正意が『征伐記』、鮮人(センヒト)柳成龍が『懲毖録』あり。これに『秀吉家譜』・『清正記』・『朝鮮軍談』など…を閲してそがいくさのさまを画工に令してうつしゑにし、わらはべのめざまし草となす。」(巻之一「大あらまし」)

「抑(そもそ)も此草紙は、世の諺(ことはざ)をもつて旧書『朝鮮征伐記』、あるは柳成龍(りう・せいりう)が『懲毖録(てうひろく)』、又は『朝鮮軍記』等を摘取(てきしゆ)し、家々の譜録を閲(けみ)して、そこはかたなく書つらね、あるひは絵にあらはし、春雨のつれづれ、秋の長き夜の友となさしめ、御伽人形とはなりたりけり。」(巻之十 末尾)

*前掲国文研本により、原本の振り仮名を適宜省略、句読点・書名の『』を添えるなど、

読みやすく改めた。以下、他の資料も同様。

- 『朝鮮征伐記』：戦記。堀正意著。大本 9 巻 9 冊。漢字ひらがな交じり・絵入り。万治 2 年（1659）6 月、〈京〉「二条通鶴屋町田原二左衛門」刊。【画像】
- 『懲毖録』：秀吉朝鮮出兵の記録。柳成龍著・貝原益軒序。大本 4 冊。漢文（訓点付き和刻本）。元禄 8 年（1695）正月、〈京〉「二条通 大和屋伊兵衛写板」。【画像】
- 『豊臣秀吉譜』：伝記。林羅山著。大本 3 冊。訓点付き漢文。明暦 4 年（1658）7 月、〈京〉「荒川四郎左衛門梓行」。
- 『清正記』：戦記。古橋又玄他著。大本 5 巻 5 冊。漢字ひらがな交じり・絵入り。寛文 3 年（1663）正月、〈京〉「長尾平兵衛開板」。

卷之一・十にいう『朝鮮軍談』・『朝鮮軍記』は『朝鮮軍記大全』を指す。

＊「本作の種本となったのは、『朝鮮軍記大全』（宝永二年〈1705〉刊）であつたと考えられる。日本における〈朝鮮軍記物（壬辰倭乱作品群）〉の流れは、一七世紀まで日本で著された作品群と、明・朝鮮で著された作品群とを統合した、**姓貴『朝鮮軍記大全』・馬場信意『朝鮮太平記』（宝永二年刊）**の二つの大作を以て集大成されたといえるが…、『絵本朝鮮軍記』は『朝鮮軍記大全』の方を種本として、その本文を縮約し、人名・地名・官名に傍線を引くなどの工夫を凝らし、一、二丁毎に（挿絵を加えて刊行した）のである。」（『読本事典』Ⅰ－ⅱ「上方＝〈絵本もの〉読本のひろがり」、『絵本朝鮮軍記』の項〈金時徳〉、前掲）

『朝鮮軍記大全』

○『朝鮮軍記大全』：戦記。姓貴著。大本 15 冊（38 巻附録上下 国立公文書館 168－0091 による）。漢字カタカナ交じり。宝永 2 年（1705）8 月、〈京〉大和屋伊兵衛刊カ・〈江戸〉出雲寺店売り捌きカ

＊井上泰至『近世刊行軍書論』第一章第二節「近世刊行軍書年表稿」、笠間書院、2014）85 に「御書物所 京都三条通堺町／出雲寺松柏堂」とある。初（早）印本未確定。

「朝鮮軍記大全序」

ア。「豊臣秀吉朝鮮征伐、事理ノ間、其（ソノ）論ズル所ノ是非ニ於テハ、先輩其説ヲナス。小子今更（イマサラ）何ヲカ謂（イハ）ン。」

イ。「而（シカフ）シテ其事跡ヲ述ル所ノ書記モ又、後世幾人（イクヒト）カ其筆（フンデ）ヲ勞セルヤ、書肆ニ梓スル者ニ於テ寔ニ多シ。…然モ其記スル処、同事異論ノ一決シガタキアリ。…故（カルガユヘ）ニ三事ハ三書ニ相違アリ。二理ハ両処ニ齟齬（クヒチガ）ヒテ、多編数説、一定（イチデウ）ノ論ナケレバ、後世ノ見ル者、其向カフ多違（タキ）ニシテ実ニ以テ途（ト・ミチ）ニ惑（マド）ヘルカナ。斯（コ）レ我ガ再ビ贅言（コトヲカ

サネ)テ、揖録(シフロク)スルノ微意ナルカ。」

ウ、「惟(ヒト)リ朝鮮国柳左相成龍ガ懲毖録ト本朝堀正意(シヤウイ)ガ征伐記アリ。其載(ノ)スル処簡要ニシテ、書スル処質直(マコトニタダシ)ナリ。…(ただし、両国の記述にどうしても偏りが生じてしまうので)今我記する所は、林翰林(林羅山)の応(ヲウジ)(二)台命(タイメイニ 将軍の命令)(一)テ書スル処ノ、豊臣家譜ヲ以テ、其場ヲ定(サダム)ルノ幹禎(モト)トシ、懲毖録・征伐記ヲ取(トツ)テ左右翼(ツバサタスケ)ヲ張り、…其外明記(ミンキ)・小説・和語・雑篇、一トシテ見ル処有ルヲバ尽(コトゴト)クコレヲ摘取(ツミトル)ス。且又(カツマタ)我ガ幼歳(イトケナキ)ヨリ、好ム処ノ兵書、伝へ受ルノ法術ヲ以テ、コレヲ折衷ス。」

『朝鮮軍記大全』・『朝鮮太平記』と『絵本朝鮮軍記』

『朝鮮軍記大全』と同年同月に、形態的にも非常によく似た『朝鮮太平記』が刊行された。

○『朝鮮太平記』：雑史(戦記)。馬場信意著。大本15冊(30巻目録1巻)。漢字カタカナ交じり。宝永2年(1705)8月、(江戸)須原屋茂兵衛・玉置次郎兵衛・(京)山岡四郎兵衛刊

「読み物としての性格が既に濃厚であった『朝鮮太平記』…地味な内容の『朝鮮軍記大全』…」(金時徳『異国征伐戦記の世界ー韓半島・琉球列島・蝦夷地』第I部第一章第七節「読本になった朝鮮軍記物」、笠間書院、2010『読本事典』の『絵本朝鮮軍記』の項(前掲)も同じ)

「本書(『朝鮮太平記』)では、歴史の推移は、こうした(豊臣秀吉・加藤清正・小西行長・石田三成・沈惟敬)人物の造形とやりとりに集約的に描かれており、そのわかりやすさ、おもしろさが、事態の推移のみを坦々と記述する『朝鮮軍記大全』との大きな相違だったのである。」(井上泰至『近世刊行軍書論』第三章第一節「通俗刊行軍書作家馬場信意の執筆態度ー『朝鮮太平記』を例に」、前出 初出2011・6)

籙島が『絵本朝鮮軍記』の主要典拠として、『朝鮮太平記』でなく『朝鮮軍記大全』を採用したのは、信意のようにメリハリをつけず、平叙に徹した姓貴の記述方針を良しとしたものであろう。しかし、これは「地味な内容の『朝鮮軍記大全』の方が、創作の余地を見つけやすかった」(金時徳2010、前掲引用に続く一節)ためではなく、『源平盛衰記図会』を論じた前掲拙稿に、「**「創作性」を抑制し、…時代に即した入門書・娯楽読みもの**」を志向(試行)していると記した、籙島(図会もの)の性格と共通したものなのではないか。籙島にとって、『朝鮮太平記』は、直接典拠とするのには「創作性」が勝ちすぎているのだと思う(ただし、同時に『朝鮮軍記大全』にはない「加藤清正が韓半島の北辺から富士山を見渡したという記事」(同上)の増補などを行っているのは、籙島が商業的要請を受け入れ

たものと理解することができ、同様のことは他の〈図会もの〉にも見られる。

籙島の「読本」の性格

ここまで紹介してきたように、籙島の「読本」4作は、2.『絵本朝鮮軍記』を含めて、近世になって刊行された、大本・漢字カタカナ交じりの「軍記（軍書・戦記・雑史）」を典拠としている。このことのもつ意味を、濱田啓介「近世小説本の形態的完成について」を応用して説明したい。

・「近世後期小説本（読本・人情本・合巻・滑稽本）に先行する近世小説本には、大局的に三つの型がある。1 草子屋系の諸本、2 書物屋系の諸本、3 洒落本系の小本の三型である。」

・「書物屋系の本と草子屋系の本（以後草子本と言う）とは、ここに、片仮名・挿絵無し・口絵無し／平仮名・挿絵入り・口絵無し／という対立した二系と捉えることができる。」

・「保元平治平家などの巨編の諸刊本の概要を説くことは論者に不可能であるが、ともかく『平家物語』に平仮名挿絵入りの本が有（ママ）することは確かである。一度片仮名本として刊行された軍記が、二次的に平仮名本として刊行される場合がある。書物としての史書が草子本として刊行されなすということである。その時、あらためて挿絵が加えられ、平仮名絵入り本として登場する。『前太平記』平仮名本…などはこの事例である。すなわち草子本になるということと、挿絵が加入されるということは、不可分の関係にある。」（濱田啓介『近世文学・伝達と様式に関する私見』6、京都大学学術出版会、2010 初出 2002・1)

籙島の「読本」1・3・4の主要典拠は、すべて「書物屋系の本」・「書物としての史書（歴史書）」に含まれる。正統的な軍記を典拠とする1・3に対して、4の典拠『前太平記』は「近世刊行軍書」（井上）であるが、内容的には、「清和源氏」の沿革史として4・3・1の順につながり、鎌倉幕府の開設によって完結するかたちになっている。

濱田論文に即してまとめれば、籙島の〈図会もの〉1・3・4は、本の形態としても、「書物としての史書」を、刊行された「草子本」のうちで最も広い容量をもつ〈名所図会〉の造本様式に組み入れた二次的刊行物として発案されたものである。

＊金時徳「壬辰戦争はどのように描かれたのか」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか 江戸から見る自意識の変遷』Ⅲ、笠間書院、2015）に「彼（籙島）はこれらの絵本軍記（「読本」1・3）をあくまでも伝統的な絵本ジャンルに属するものと理解したようで、丁付を本のノドに表記するなど、書誌的にも絵本と同じ様式を採択した。」とされる【画像】。丁付が本のノドの部分にあるのは「草子本」の特徴であり、〈名所図会〉もすべてそのようになっている。

1・3・4に対して2の典拠は、4と同じく「近世刊行軍書」であり、「書物屋系の本」に含めて良いものと考えられるが、これを受容した2が「絵本」を標榜するについては、『絵本太閤記』との関わりを問題にする必要がある。

三

『絵本太閤記』の刊行

○『絵本太閤記』：〈絵本もの〉読本（絵本読本）。岡田玉山画作（武内確斎・文）。半紙本。初～七篇各12巻12冊（未完）。漢字ひらがな交じり。

初編、寛政9年（1797）冬、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈大坂〉4書肆刊。二編、寛政10年（1798）秋、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈京〉〈大坂〉6書肆刊。三編、寛政11年（1799）、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈江戸〉〈大坂〉5書肆刊。四編、寛政11年（1799）秋、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈江戸〉〈大坂〉6書肆刊。五編、寛政12年（1800）、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈大坂〉5書肆刊。六編、享和元年（1801）、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈江戸〉〈大坂〉7書肆刊。七編、享和2年（1802）、〈大坂〉勝尾屋六兵衛ほか〈江戸〉〈大坂〉7書肆刊。

*山本卓『『絵本太閤記』の成立と出版』（『舌耕・書本・出版と近世小説』第一章 前掲）に初印本の書誌的特徴を述べる。国文研所蔵ナ4-762-1～84は、その特徴を備えた善本。

「通俗史・一代記ものの絵本として企画・成立したが、結果として、本格的絵本読本という形式を画定し、また、長編史伝読本の先例作品となった。

豊臣秀吉の一代記を、挿画とともに読み娛ませるのを目的とする。写本の史伝実録『太閤真蹟記』（12編360冊、作者白栄堂長衛）を主たる原資とするが、作文者（武内確斎）の文章として成立している。本書は、本来的な創作態度も、原資実録との関係も、一義的ではなく、本作に「作者」を表示することは単純でない。本作は、文化元年（1804）6月、幕府当局により絶板を命ぜられた。後年安政6年（1859）、再板が許可されている。」（『読本事典』I-iii『絵本太閤記』の項【概説】〈濱田啓介〉、前掲）

『絵本太閤記』六・七編・『絵本朝鮮軍記』の刊行

「六編は秀吉の朝鮮出兵の記事。七編は、朝鮮役の記事を主とし、石川五右衛門の事、関白秀次の破滅の事などを記す。朝鮮役の記事は、大枠を『朝鮮軍記大全』により、『豊臣秀吉譜』・『朝鮮征伐記』・『豊臣秀吉伝』、明の『武備志』、朝鮮の『懲毖録』・『西厓先生文集』等が参照されている。石川五右衛門の件は、実録『賊禁秘談』による。」（『読本事典』I-iii『絵本太閤記』の項〈濱田啓介〉、前掲）

『絵本朝鮮軍記』(寛政12年(1800)2月刊 京都の出雲寺文次郎主導の出版と考えられる)が先立って刊行されたことに対する、『絵本太閤記』(六編、享和元年(1801)刊、(大坂)勝尾屋六兵衛主導の出版)側の対応(両者の典拠はほとんど同一で、互いに「類版」(*)の関係にある)。

*「類版 内容や形式が、既存の書籍に類似し、その既得の權益を脅かすと認定されること。またそのように認定された書籍。類版本ともいう。江戸幕府は、重版・類版の制禁については、本屋仲間の自治にまかせており、重版同様、類版の認定も、仲間内の裁量に基本的にまかせていた。…」(『日本古典籍書誌学辞典』、「類版」の項(鈴木俊幸)、岩波書店、1999)

・「一 京都ニ而出来候朝鮮軍記、当地絵本太閤記ニ差構候付、江戸表へ添章被取ニ出候共先見合呉様、勝六(版元の勝尾屋六兵衛)より口上被申出候ニ付、此段江府(江戸)へ通達致候事、尤口上書写為登置候。」(寛政12・閏4・25)

・「一 絵本朝せん軍記之義ニ付、河喜(大坂での売り捌き元と見られる書肆河内屋喜兵衛)呼ニ遣し候事。 一 朝鮮軍記一件ニ付、河喜殿相招キ、(『絵本朝鮮軍記』版元から『絵本太閤記』版元に)挨拶致被遣候様中通候事。 一 太閤記板元(勝尾屋六兵衛)呼寄、右之様申聞候事。」(同・5・11)

・「一 京都ニ出来候朝鮮征伐記絵本出入、河喜殿取扱ニ頼置候事。」(同・5・20「行司交代申送り之覚」)

・「一 太閤記板元(勝尾屋六兵衛)より、朝鮮軍記掛合相済候口上書被差出候ニ付、江戸表江相済候趣書状出ス事。」(同・5・20)

*『大坂本屋仲間記録』第二巻「出勤帳 二」所収「出勤帳十六番」(清文堂、1976)

両作の類版問題が短時日のうちに解決したのは、内容的に共存が認められたためであろう。

『絵本太閤記』の内容的特徴と『絵本朝鮮軍記』

(実録『太閤真蹟記』(『絵本太閤記』第五編までの直接的典拠)にも顕著な)講釈者の理由付けは、…エピソードの加入という方法による。こういう話も有る、こういう話も伝えられているというやり方で、もっともらしさが塗り重ねられて行く。かくて少しの史実に多くの後作の挿話が加わったものが通俗軍談であろう。そうして『絵本太閤記』は、正にそれら先行軍談の総決算というべき地位に立つものであった。講釈者の当座性、あざとさを見せる事なく、構成的にしっかりとしたもの仕上げる事が『絵本太閤記』の立場であった(他の箇所「講釈者流の方法が先ず有って、読本作家(著述家)によってそれがより構造的にすすめられた」ともある)。

*濱田啓介「絵本太閤記と太閤真蹟記」、『読本研究新集』第二集、翰林書房、2000・6

『絵本太閤記』の壬辰戦争記事は、豊臣秀吉から肥後国を賜った佐々成政（さつさ・なりまさ）が北政所・淀君の二人の葛藤により殺され、小西行長・加藤清正が肥後国を半分ずつ賜ることが記された五編巻八から始まるといえる。…『絵本太閤記』における（明・朝鮮との）和議交渉は、明国の皇帝になろうとした豊臣秀吉を淀君・石田三成・小西行長らが騙した不忠の事件であるのみならず、（その失敗は）日本の武威を異国に輝かせることを挫折させた事件でもあった。…一方、…当主（秀吉）の後継者選びを巡って二人の候補者（豊臣秀次と石田三成）の後見人（北政所と淀君）が対立し、その臣下の忠臣（加藤清正）と奸臣（小西行長）が対立し、終には忠臣が勝利するという構図が、『絵本太閤記』に見受けられるのである。（金時徳『異国征伐戦記の世界－韓半島・琉球列島・蝦夷地』第Ⅰ部第一章第七節「読本になった朝鮮軍記物」 前掲）

『絵本太閤記』六編卷之十一 2 「太閤朝鮮之戦将賞罰」

・「(慶長2年〈1597〉7月)、浅野長政(弾正)と黒田孝高(如水)が朝鮮に渡り、宇喜多秀家(秀吉)からの命令を伝える場面がある。その直後に三成は増田長盛、大谷善継とともに長政らに面会しようとするが、長政と孝高は囲碁に夢中で三成らに気がつかない。三成はおおいに怒り、その後、いよいよ不仲となっていく。しかし、ここでも語り手が解説を加え、長政も孝高も、囲碁に心を奪われるような人物ではないと弁護する。実は(加藤清正側の)長政は、三成が淀殿との計略によって偽りの和議を結ぼうとしていることを知り、孝高と心を合わせ、三成を怒らせ、口論にこと寄せ、刺し違えて死のうと考えていたのである。一方、三成もそれを察知し、ことを荒らげなかったというのである。」(堀新・井上泰至編『秀吉の虚像と実像』「12 豊臣政権の政務体制 虚像編」〈井上泰至〉、笠間書院、2016)

・「此事諸書に碁を囲んで礼を失ふとのみ記(しる)せり。是(これ)事を詳(つまびらか)にせざる者也。朝野(浅野)は世にきこへたる勇武の将、如炊(如水)又英才を以て人に譲らず。太閤の命を令(りやう)し遠く朝鮮に入て碁の戯れに心を奪れ君命を怠慢せる愚人ならんや。見る者深く察して味(あじは)ふべし。」(12 ウ)

『絵本太閤記』五編までの内容的特徴が、直接には『太閤真蹟記』を踏まえない六編以降にも引き継がれていることは、上記のとおり。

『絵本朝鮮軍記』巻之八「日本諸将籠(こもる)(二)釜山浦(ふさんかいの)数城(すじやうに)(一)」【画像】

「増田・石田・大谷は秀吉公の命を奉(うけたまは)らんと朝那(浅野)が旅館に来る折節、如水と弾正は碁を囲(かこみ)て居たりしが、碁の勝負を争ふて余念は更(さら)になかりけり。三将の入来(じゅらい)をも知ざれば、稍(やゝ)暫し側(かたはら)に座せりといへども何の挨拶も無(なき)ゆへに、石田は増田・大谷に眼(め)くばせして、

そつと座を立て帰りける。

其後、(弾正・如水は) 碁の黑白 (こくびやく) の勝負を分 (わか) ち始てこれに意 (こゝろ) ついて「三奉行の輩 (ともがら) は何くへぞ」と尋 (たづぬ) るに、近習答て「早御還 (おんかへり)」といふに、先刻よりの怠 (おこたり) を悔 (くやみ)、早速に使者を馳 (はせ)、再三に及ぶといへども、三奉行はこれを拒んで敢て再び対談せず。…弾正・如水は世の人口の笑 (わらひ) 嘲 (あざけ) ることを恐るゝのみならず、太閤の御怒 (いかり) を思ひめぐらし、三奉行にさまざまの謝 (しや) をなして宥 (なだむ) といへども遂に相会 (さうくはひ) せず。

因茲 (これによつて)、秀吉公の命令を諸将に通じて、二人は空 (むなし) く帰朝ある。其後太閤これを聞給ひ、両将の怠慢を糾 (たづ) し給ふ。於是 (こゝにおいて)、双方意恨 (みこん) を含 (ふくめ) る事の端とぞ成にける。」

この挿話は『朝鮮軍記大全』・『朝鮮征伐記』にはなく、小瀬甫庵『太閤記』巻第十四「就 (ついで) (下) 于可 (レ) 相 (二) 攻 (せむ) 本曾我 (もくそが) 城 (を) (一) 御書 (に) (上) 評議 (ひやうぎ) 之事」によるか。『絵本朝鮮軍記』の行文は、さらに表現を抑制しているため、これだけでは「双方意恨 (遺恨)」の理由は不明瞭とも言える (同じ挿話は『黒田家譜』第七巻にも載るが、「三奉行の、殊に石田が平生権勢にほこる事をにくみて」との理由付けがなされている)。

○小瀬甫庵『太閤記』: 伝記。小瀬甫庵著。大本 20 冊 (国文研所蔵ナ 4-5141-1-20 全 22 冊のうち合冊あり。漢字ひらがな交じり。万治 4 年 (1661) 4 月、〈京〉吉文字屋刊。正保 3 年 (1646) 版の求板本 (新日本古典文学大系 60『太閤記』解説、檜谷昭彦・江本裕校注、岩波書店、1996)。

○『黒田家譜』: 伝記。貝原益軒著。写本 16 冊。福岡県立図書館竹田文庫所蔵 (同図書館データベース画像による)。

以上、『絵本太閤記』に対して、『絵本朝鮮軍記』の内容的特徴がはっきりと現れた箇所をあげてみた。申し述べてきたように、『絵本朝鮮軍記』は、〈図会もの〉3 作 (〈名所図会〉シリーズを受けて「創作性」を意識的に抑え、「歴史」のあらましを一般読者に親しみやすく伝えるための絵入り草子本として工夫された) と同様の特徴を備えている。

著述の方向性として、これは『絵本太閤記』と正反対と言って良い。『絵本朝鮮軍記』が半紙本で、題名に「絵本」を冠しているのは、恐らく『絵本太閤記』の人気を意識した商業的要請によるものであり、籙島の〈図会もの〉読本の 2 作目にあたる『保元平治闘図会』の外題が「絵本保元平治」であるのも、〈絵本もの〉の商業的優位の反映と思われる。しかし『絵本朝鮮軍記』の内実は、そのことは別の尺度で理解すべきであろう。

参考

以下は、現在の「読本」研究の基礎を築いた先達が、後期読本の流れの中に〈絵本もの〉・〈図会もの〉を位置づけた記述である。過去半世紀にわたり専門研究者間の理解を代表してきた見解であるが、今回紹介した新しい研究によって乗り越えられつつある（江戸の読本との対比については、今回は扱わなかった）。

「『**絵本太閤記**』の流行に伴って）目はしのきく**書肆**は、引き続いて秀吉の朝鮮征伐を扱った『**絵本朝鮮軍記**』…を出板する。」（横山邦治『読本の研究 江戸と上方』第一章第三節「絵本ものの諸相」 前掲）

「この**戦記物語の図会化**という**出板現象**は、上方において速水春暁斎などによる**絵本もの**が、江戸の**稗史ものへの対抗策**として盛んに売り出されているのと軌を一にするものと考えていいであろう。…

いずれにしても、読本という文学領域における文学的価値は、ほとんど零に等しいともいえるが、その大本で挿絵の多い、しかも**安易に造り出される内容**を許している籙島の図会ものは、…**読本史上での現象的価値を重視すべき作品**であって、その点に限定すれば、籙島は名所図会のみでなく、読本史のうえでも一つの**先駆者としての地位**を認められるであろう。」（同上第一章第三節「図会ものの諸相」 前掲）

終わりに

籙島の〈絵本もの〉・〈図会もの〉は、『絵本太閤記』に代表される〈絵本もの〉とは逆に、「歴史書」の記録性をできるだけ残した草子本として執筆されたが、文化元年（1804）6月の『絵本太閤記』絶板処分に伴い、籙島の5.『信長記拾遺』に基づく7.『絵本信長記拾遺』（「太閤記」ものと重なる内容をもつ。ただし別人による著述か）も処分されたことが、籙島のこの方面の著述活動の終結につながったものと考ええる。

最後に『絵本朝鮮軍記』について個人的な感想を申し述べれば、主要人物のうち最も好感をもって描かれたのは、権力者秀吉の野望に加担した加藤・小西ほか日本の武将たちではなく、明国の軍人や沈惟敬などの関係者でもなく、朝鮮王朝の存続に力を尽くした文官柳成龍（リュ・ソンリョン ユ・ソンヨン）と、共に闘った明国の将や日本勢からも武略・人徳を称賛された朝鮮水軍の指揮官李舜臣（イ・スンシン）であったと思う。これは私一人の感想ではなく、「春雨のつれづれ、秋の長き夜の友」として『絵本朝鮮軍記』に親しんだ読者の多くにとっても同様であつただろう。そうした感想の生まれる根拠として、前掲した柳成龍『懲毖録』の訓点付き和刻本（貝原益軒序、元禄8年〈1695〉刊）の流布が考えられるが、『懲毖録』を多く受容した『朝鮮軍記大全』を間に挟んで、中庸を行く「朝鮮軍記」を提示した籙島の執筆姿勢を、私は好ましく思う。

*金時徳「近世文学と『懲毖録』—朝鮮軍記物（壬辰倭乱作品群）とその周辺—」（「近世文藝」88、2008・7）

古典籍セミナー 第4回「朝鮮軍記と出版文化」

軍記と読本（よみほん） —『絵本朝鮮軍記』の位置—

国文学研究資料館名誉教授

大高洋司

北京日本学研究中心

2018年2月27日

『都名所図会』

(みやこめいしよずえ)

卷之一表紙

大本6巻6冊

秋里籬島著

竹原春朝斎画

安永9年(1780)刊

天明6年(1786)再印

国文学研究資料館

長谷文庫蔵

93-78-1~5

DOI:

[https://doi.org/10.20730/](https://doi.org/10.20730/200014564)

200014564



『都名所図会』

(みやこめいしよずえ)

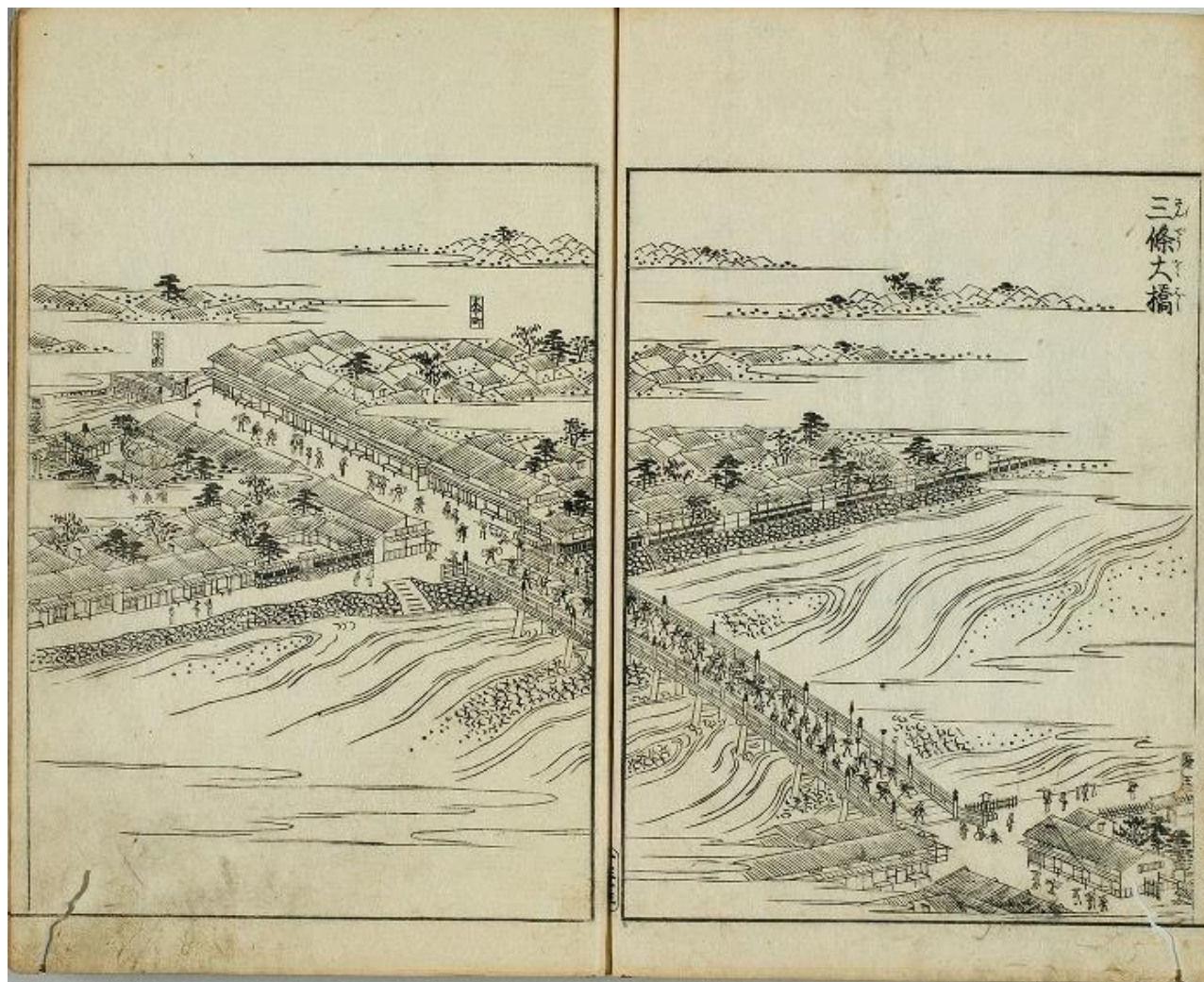
卷之一「三条大橋」

国文学研究資料館
鶴飼文庫蔵

96-901-1~6

DOI:

<https://doi.org/10.20730/200020161>



『源平盛衰記図会』

(げんぺいせいすいきずえ)

巻之六表紙

大本6巻6冊

秋里籬島著

西村中和・奥文鳴画

寛政12年(1800)刊

個人蔵



『源平盛衰記図会』

(げんぺいせいすいきずえ)

卷之一表紙

国文学研究資料館蔵

ナ-4-944-1~6

DOI :

<https://doi.org/10.20730/200016986>



『源平盛衰記図会』
(げんぺいせいすいきずえ)
巻之六挿絵(30ウ・31才)

個人蔵



『絵本朝鮮軍記』

(えほんちょうせんぐんき)

巻之一表紙

半紙本10巻10冊

秋里籬島著

画者不明

寛政12年(1800)刊

国文学研究資料館蔵

ナ-4-718-1~10

DOI:

[https://doi.org/10.20730/
200013435](https://doi.org/10.20730/200013435)



『絵本朝鮮軍記』

(えほんちょうせんぐんき)

巻之五表紙

国文学研究資料館蔵

ナ4-718-1~10

DOI:

[https://doi.org/10.20730/](https://doi.org/10.20730/200013435)

200013435



『保元平治闘図会』

(ほうげんへいじかつせんずえ)

卷之一内題

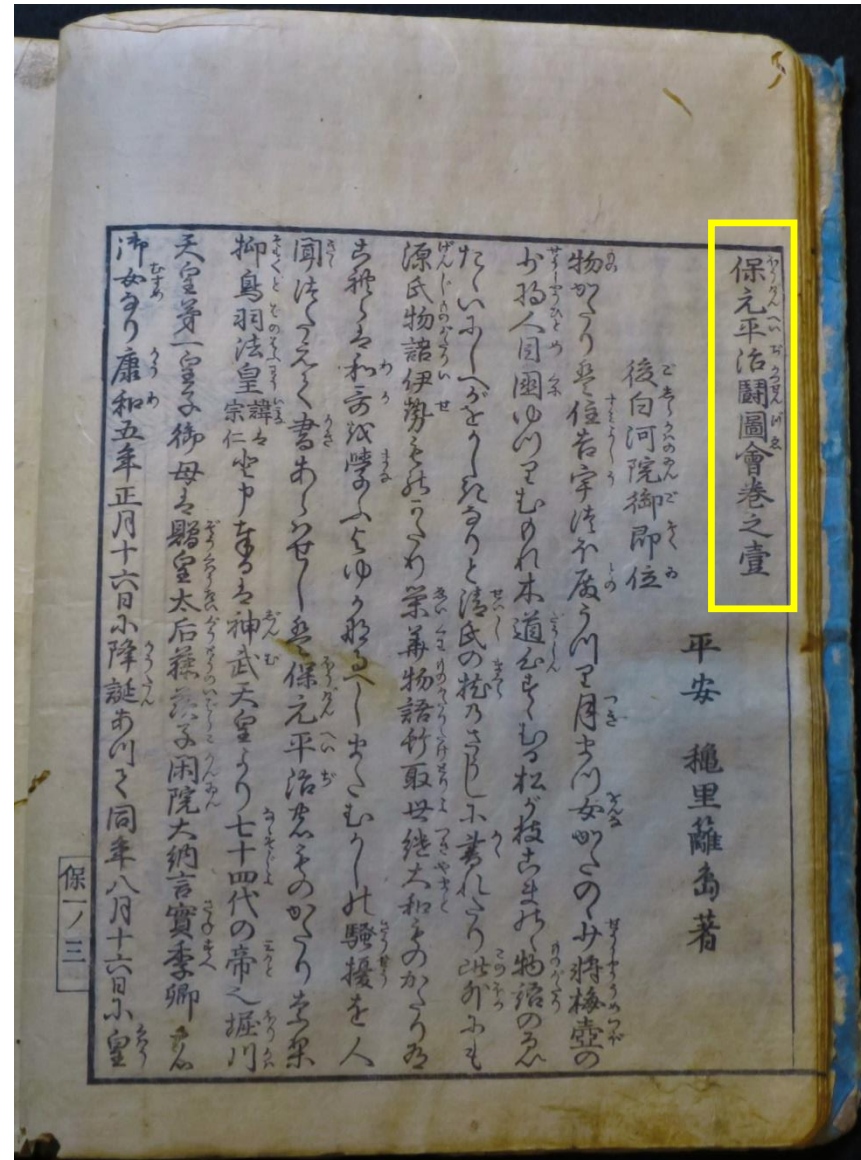
大本10卷10冊

秋里籬島著

西村中和画

享和元年(1801)刊

個人蔵



『保元平治闘図会』
(ほうげんへいじかつせんずえ)
卷之三表紙
外題「絵本保元平治」

個人蔵



『絵本忠臣蔵』前編

(えほんちゅうしんぐら)

半紙本10巻10冊

速水春暁斎画作

(はやみ・しゅんぎょうさい)

寛政12年(1800)4月刊

八戸市立図書館蔵

南15-33-1~4

(国文学研究資料館マイ
クロ資料 96-130-1)

DOI:

[https://doi.org/10.20730/
100059598](https://doi.org/10.20730/100059598)



『絵本太閤記』

(えほんたいこうき)

半紙本7編84冊

岡田玉山画・武内確斎文

寛政9年(1797)～文化元
〈享和4〉年(1804)刊

国文学研究資料館蔵
ナ4-762-1～84

DOI:

[https://doi.org/10.20730/
200014405](https://doi.org/10.20730/200014405)



木下藤吉郎像

藤吉郎像賛

公之未出世喪乾坤天生雄傑夢兆朝暉
將耀其照以破昧昏儀表殊異面貌類猿
迹多可議德協彼元用兵如鉅芟彼凶頑
忽擢率伍俄主大藩視之其末尚是泥蟠

平安皆川愿謹題



真蹟記初篇一

『絵本太閤記』
(えほんたいこうき)
五編巻之二挿絵
「賤嶽(しづがたけ)戦
場之地理」

国文学研究資料館蔵
ナ4-762-1~84

DOI:
<https://doi.org/10.20730/200014405>



『源平盛衰記』

(げんぺいじょうすいき)

巻第一

無刊記整版本

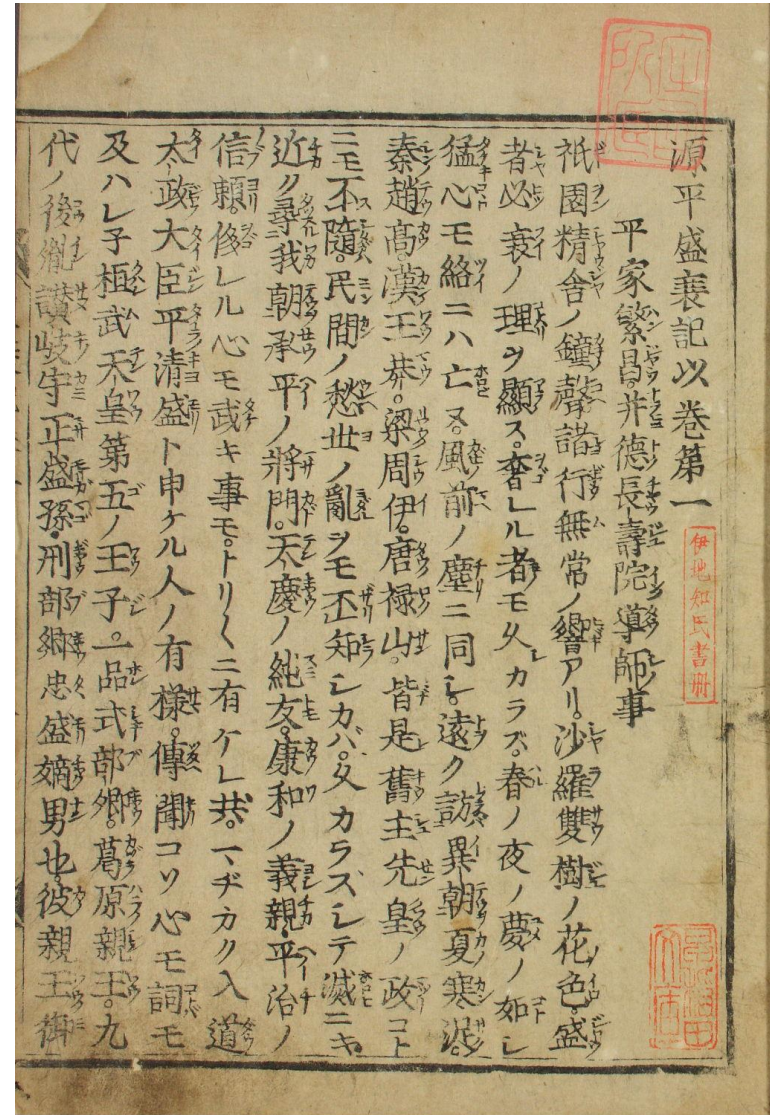
大本49巻25冊

早稲田大学図書館

伊地知鐵男文庫蔵

早稲田大学古典籍総合

データベースで検索



『平治物語』

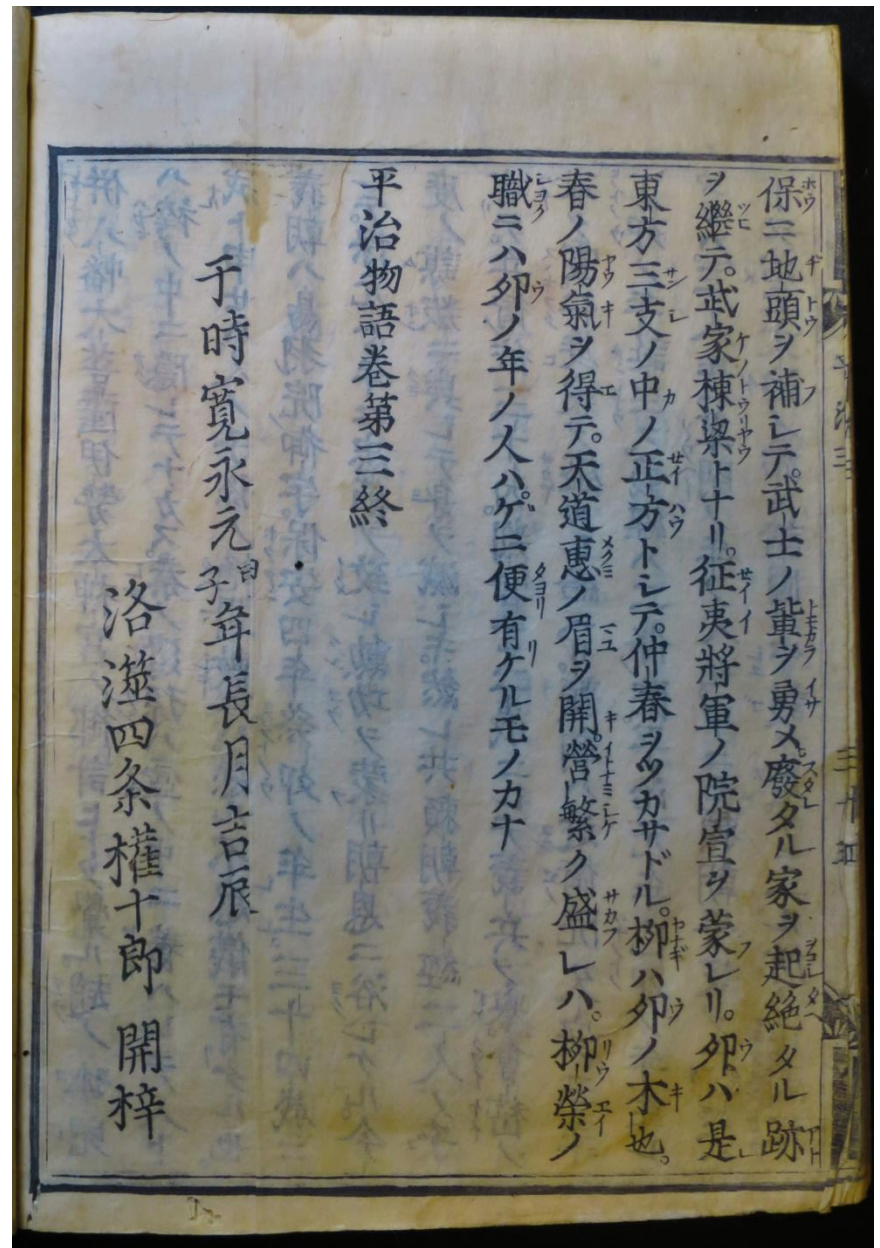
(へいじものがたり)

卷第三末尾・刊記

大本3卷3冊

寛永元年(1624)刊

個人蔵



『参考平治物語』

(さんこうへいじものがたり)

卷第一

大本3卷3冊

元禄2年(1689)刊

個人蔵

参考平治物語卷第一

常陽水戸府

魯齋今井弘濟將興甫 考訂

著軒内藤貞顯仲微甫 重校

信賴信西不快事

竊惟^{ちか}レハ三皇五帝ノ國ヲ治ス。四岳八元ノ民ヲ撫^もル。皆是器ヲ見テ官ニ任^{とく}シ。身ヲ顧^{かみ}テ祿ヲ受ル故也。君臣ヲ撰^{えら}テ官ヲ授ケ。臣已^{おの}ラ量^{はかり}テ職ヲ受ル時ハ任ヲ委^{まか}シ。成ラセムル事。勞セスレテ化スト云ヘリ。故ニ舟航海ヲ渡ルニ必橈楫ノ功ヲカリ。

『前太平記』

(ぜんたいへいき)

卷第一

大本40卷41冊

藤本元著

元禄5年(1692)

以前刊

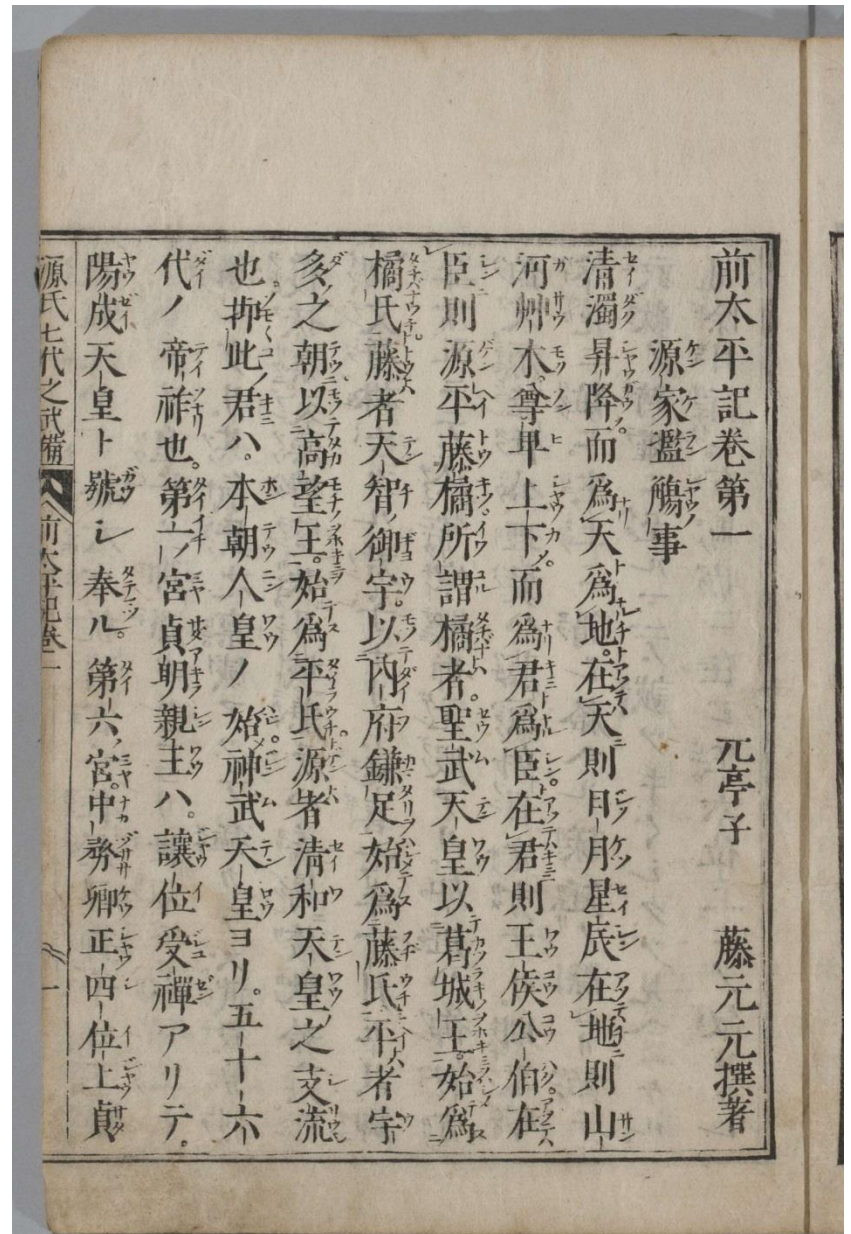
国文学研究資料館蔵

タ4-79-1~41

DOI:

[https://doi.org/10.20730/](https://doi.org/10.20730/200021109)

/200021109



『朝鮮征伐記』

(ちょうせんせいばつき)

卷一

大本9巻9冊

堀正意著

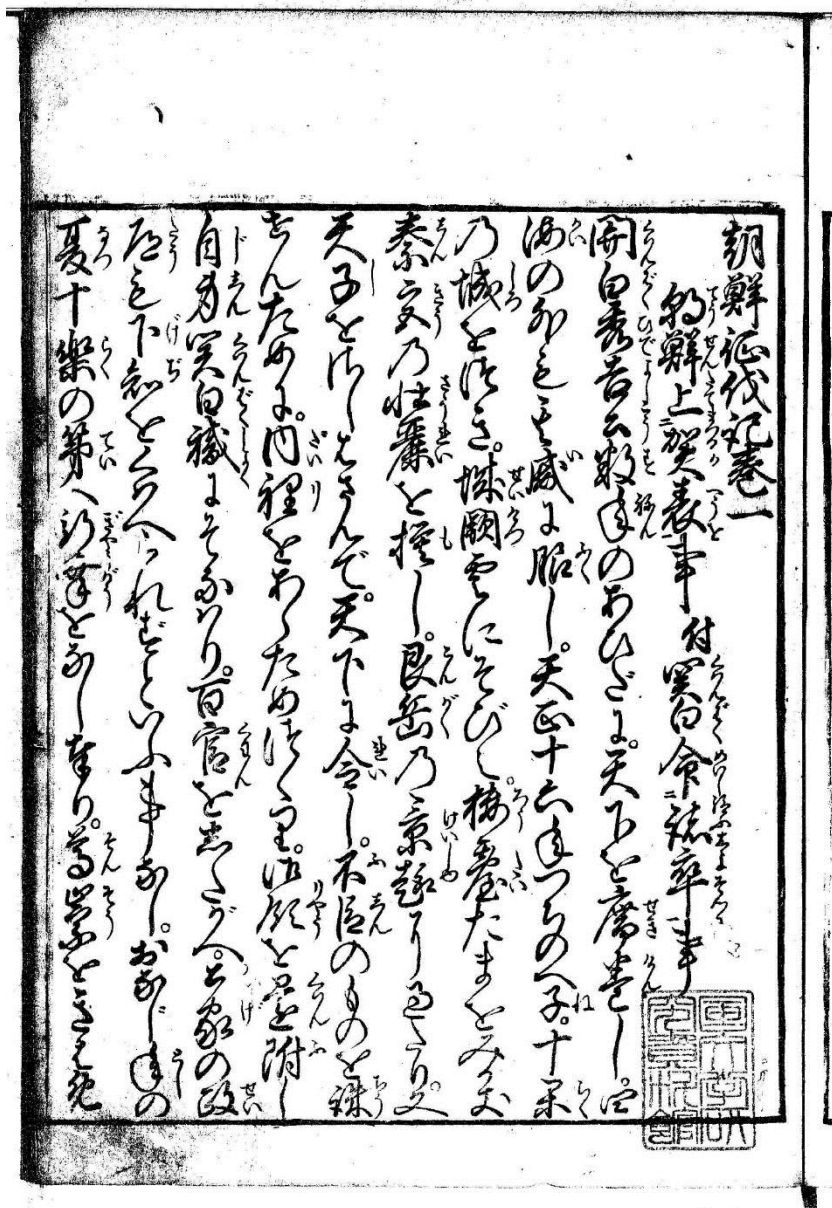
万治2年(1659)刊

国文学研究資料館蔵

ナ4-356-1~9

DOI:

<https://doi.org/10.20730/200006311>



『[朝／鮮]懲毖録』

(ちょうひろく)

卷一表紙

和刻本

大本4冊

柳成龍著

貝原益軒序

元禄8年(1695)刊後印

国文学研究資料館

鶴飼文庫蔵

96－1160

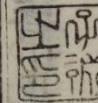
DOI:

<https://doi.org/10.20730/200020521>



成屬序於予予義此書之布行于世故本
茲編之所由作而論著之者如是只恐見
笑於大方之家已矣
元祿乙亥芒種

後學筑前列貝原篤信序



懲忠錄序

懲忠錄者何記亂後事也其在亂前者
往往亦記所以本其始也嗚呼壬辰之
禍慘矣浹旬之間三都失守八方瓦解
乘輿播越其得有今日天也亦由祖宗
仁厚之澤固結於民而思漢之心未已

『[朝／鮮]懲忠錄』

(ちょうひろく)

卷一序(益軒・柳成龍)

DOI:

<https://doi.org/10.20730/200020521>

『絵本朝鮮軍記』

(えほんちょうせんぐんき)

卷之八目録・口絵

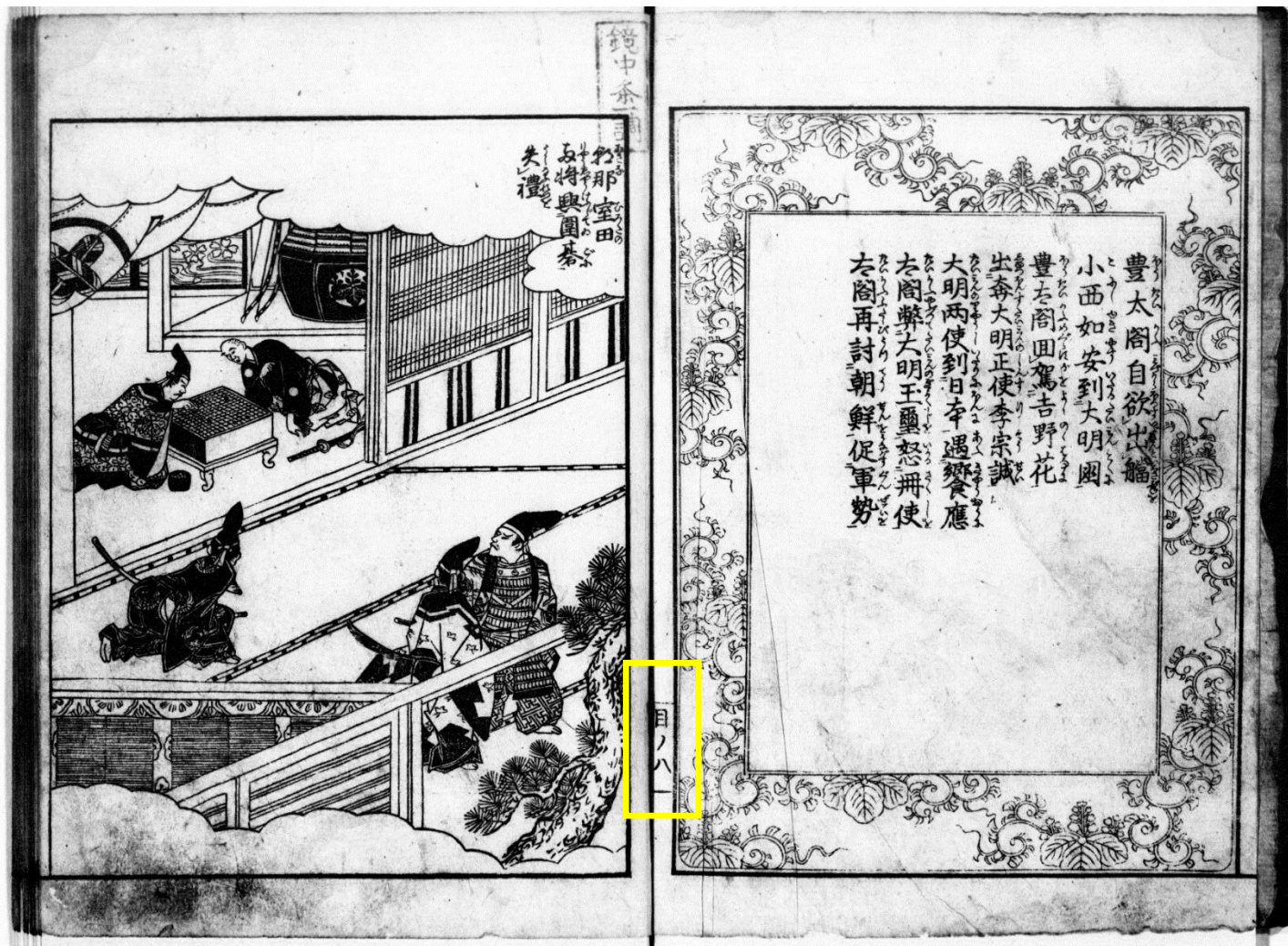
国文学研究資料館蔵

ナ4-718-1~10

DOI:

[https://doi.org/10.207](https://doi.org/10.20730/200013435)

30/200013435



『絵本朝鮮軍記』

(えほんちょうせんぐんき)

巻之八 口絵

国文学研究資料館蔵

ナ4-718-1~10

DOI:

<https://doi.org/10.20730/200013435>

